

# 地理学選択生の姫路のイメージについて

武市 伸幸

## 1. はじめに

メンタルマップとは、我々が地域に対して持っているイメージ（地図）を白紙に描いた手描き地図である。わが国のメンタルマップの研究は、寺本（1984）や寺本ら（1991）のように、成長に伴う子どもの知覚空間や生活圏の認識の変化や、異なる地域に居住する子供の知覚空間の比較検討に用いられてきた。後者の研究の応用例として、加藤（1983）は琉球大学の県外出身者に対する沖縄島内の地名の認知調査を行い、学年別の地名認知のパターンの検討を行っている。ここで琉球大学に通う沖縄県以外出身の学生の地域についての認識は全くゼロからのスタートとなるが、このことは本校に通う姫路市以外の出身者にもほぼ当てはまると考えられる。そこで、今後の授業に生かすためにも、本校の学生が姫路に対してどのような認識を持っているかを知る目的で、自然地理学および人文地理学選択生に姫路の認識についてのメンタルマップの調査を行った。

## 2. 調査内容

調査は次の2つの項目について行った。

- (1) 姫路についてどのようなイメージを持っているか知るため、初めて姫路に来た人に紹介するつもりで、姫路の地図を描く。
- (2) 距離と方位に関する認知を知るため、姫路駅の位置のみを示した紙に次の12地点の位置を記入する。

- ①姫路城      ②獨協大学      ③姫路市役所
- ④姫路市立水族館（手柄山）      ⑤姫路西高校      ⑥自衛隊
- ⑦播磨国分寺跡      ⑧J R 姫新線余部駅      ⑨J R 播但線野里駅
- ⑩山陽電鉄飾磨駅      ⑪姫路港フェリー乗り場
- ⑫J R 山陽線英賀保駅

(2)の地点選定理由については、①から⑦の地点は姫路市街地内の施設を、ま

た、⑧から⑫は各方位の釣り合いを取ることを目的に選定した。

なお、回答者数は(1) 45人、(2) 49人で、市街地内出身者は両者とも7名であった。

### 3. 初めて姫路に来た人に姫路を紹介する地図

初めて姫路に来た人に姫路を紹介する地図に記載された範囲と描いた人数を第1表に示す。

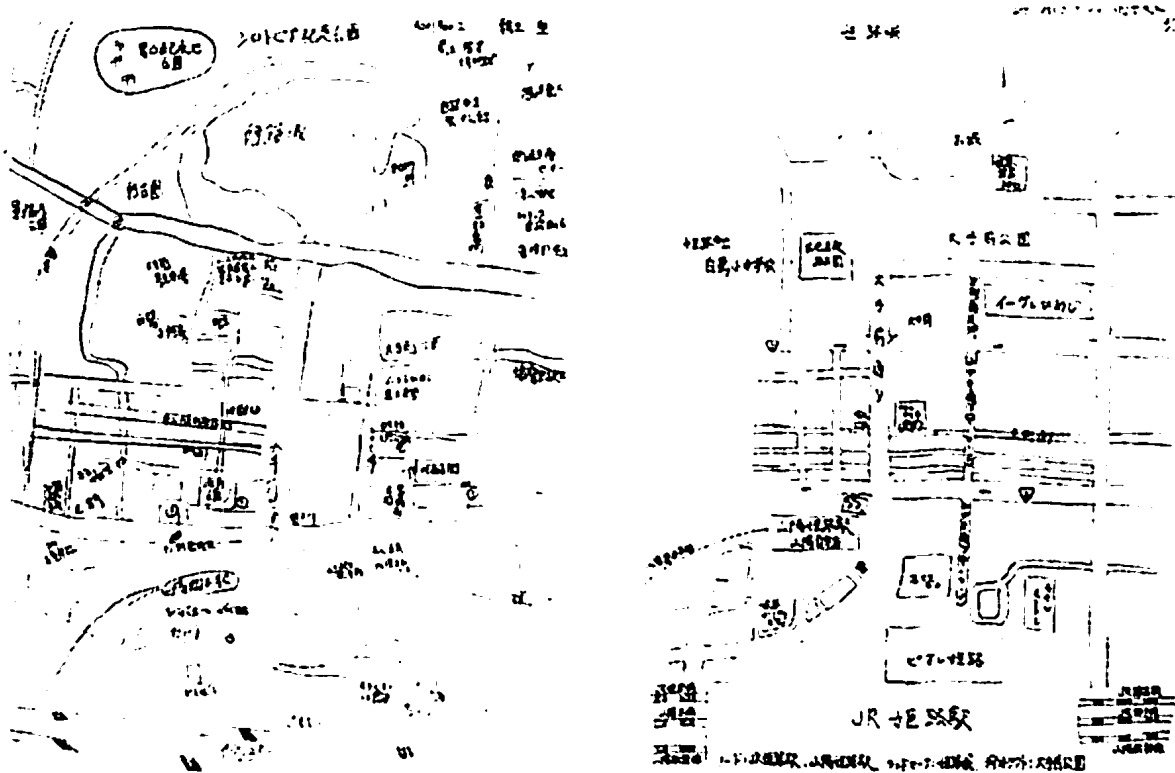
第1表 学生が描いた姫路の地図の範囲と描いた人数

描いた範囲	人数(人)
姫路駅～姫路城の範囲	27
姫路市域全体	5
姫路市市街地の広い範囲	7
姫路駅～姫路城以外の市街地の狭い範囲	6

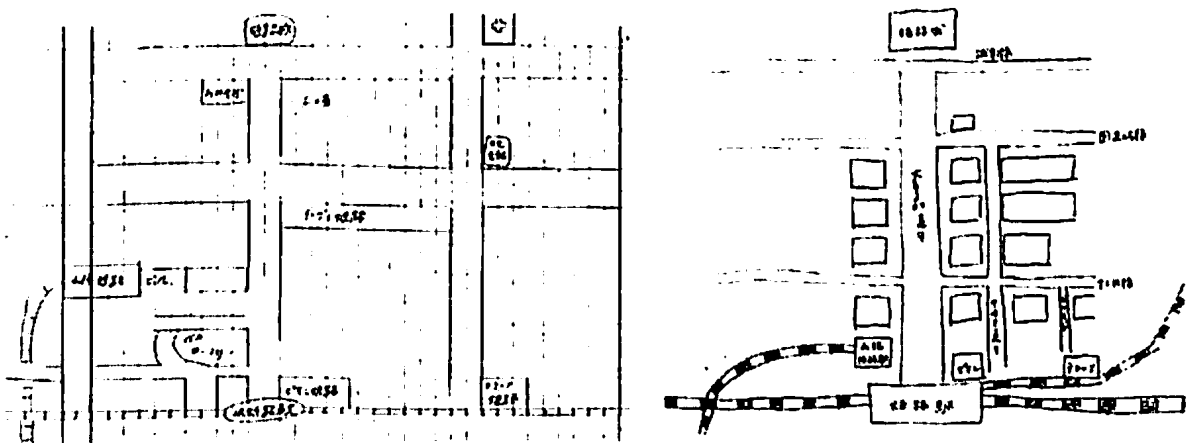
描かれている範囲としては、姫路駅～姫路城の範囲を描いた学生が27名で圧倒的に多い。これは姫路というと姫路城というイメージが強烈的なこと、姫路市市街地外に居住する学生が多く、市街地内のさまざまな施設・建物をよく知らないことなどによるものと考えられる。学生たちが図中に記入した地名や施設・建物（以下事象）は124種類のべ572個、学生1人あたりが記入した事象数は平均12.7個、記入数は1～9個が16名、10～19個24名、20～29個3名、50個～55個2名であった。一人の学生が図中に記入した地名等が少ないことも、学生たちが姫路市内をよく知らないことを表していると考えられる。

描かれた範囲ごとに学生が描いた地図を検討する。第1図(1)は学生が描いた姫路駅～姫路城の図の中で、記入事象の多い図である。範囲内の建物名や通りの名が詳しく書かれており、初めて姫路に来た人にも説明ができる図である。他方、第1図(2)は書かれている事象が少ない図であり、姫路駅と姫路城のおおまかな位置関係は解るが、両者の間にある商店街等の情報は得にくい図である。メンタルマップには、個人の作画能力も関係しており、図自体の優劣は決めがたいと考えられるが、この理由以外に描かれている事象が少ない理由として、

- ①描かれている事象はその人の周囲の環境に対する認識の高さを表していると考えられることから、描いている事象が少ない学生は周囲の環境に



第1図 学生が描いた姫路駅～姫路城の地図(1)



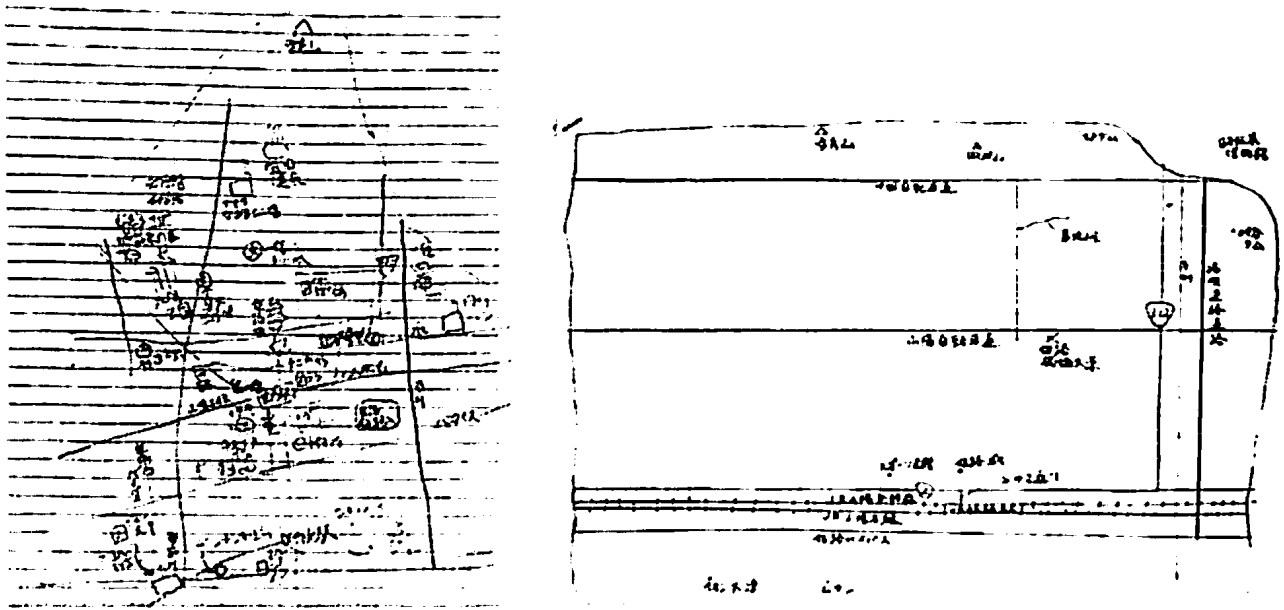
第1図 学生が描いた姫路駅～姫路城の地図(2)

あまり関心がない。

②駅前の商店街は学生たちが特に行く理由もないところであり、そもそも行ったことがないので、詳しく描くことができない。

以上のような理由も考えられる。

第2図は学生が描いた姫路市全体の地図である。左の図の学生は、市街地南部から北端まで多くの事象を記入しており、姫路市全体をよく紹介できている。

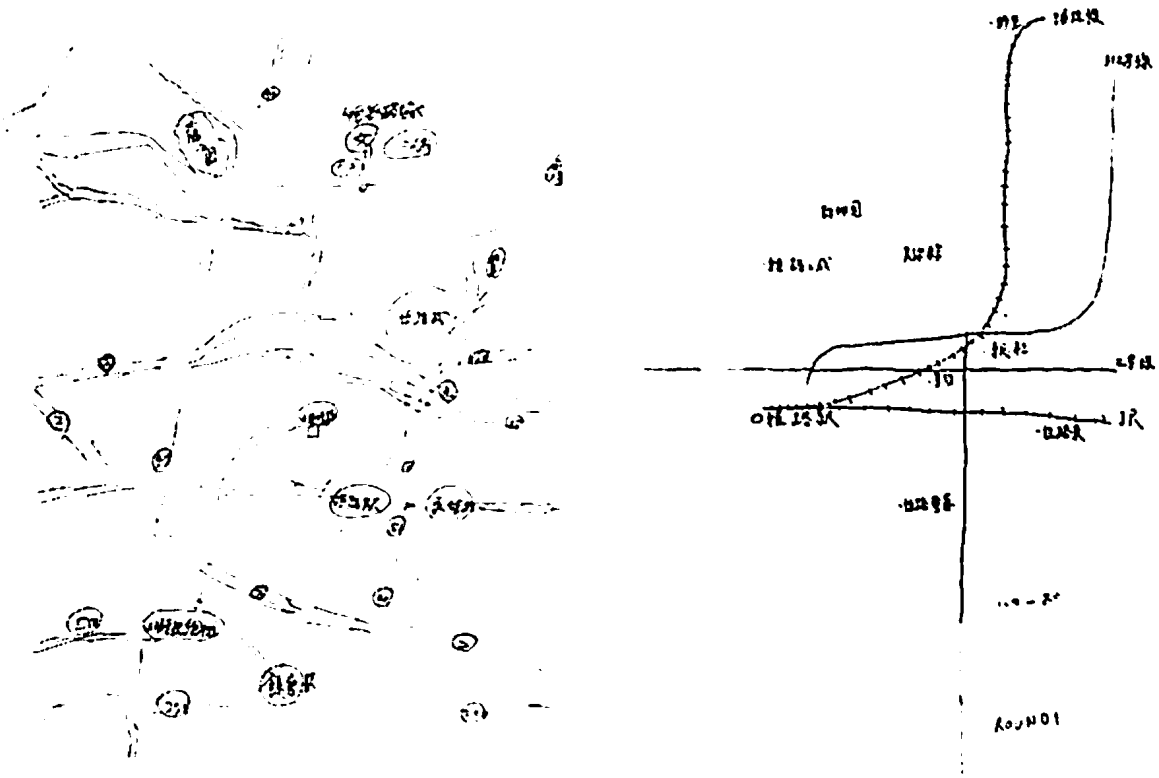


第2図 学生が描いた姫路市全体の地図

この図を描いた学生は姫路市出身の学生で、地理学に興味・関心を持っていることから、このような図を描くことができたものと考えられる。右の図の学生は鉄道や道路など、メンタルマップでいう「パス」を中心に描いている。この学生の居住地は市北東部であることから、家から大学までと姫路駅周辺が比較的詳しく描かれているが、市街地南部は詳しくないことから、南部の記載は少ない。

第3図は学生が描いた姫路市市街地の広い範囲の地図である。左の学生は市街地南部の飾磨駅から大学までの範囲を、右の学生は市街地東半について南部から野里までを、両者とも道路と鉄道を中心に描いており、施設・建築物の記載は少ない。第2図右の図の学生にも当てはまることだが、中村・岡本(1993)によると、「イメージされる範囲が広くなると、パスやデイストリクトといった要素が重要になり、ランドマークは浮かんでこない」とされているが、このことがこれら3枚の地図にはよく現れている。

第4図は学生が描いた姫路駅～姫路城以外の市街地の狭い範囲の地図である。左の図は野里駅周辺を、右の図は飾磨駅周辺を描いている。この図の課題は「初めて姫路に来た人に姫路を紹介する」ことなので、これらの図が姫路を代表しているかという疑問は残るが、日ごろ利用している駅や自宅周辺をランドマークを入れて詳しく描いている。ただし左の図には信号機や通りの名称は書かれておらず、周囲の環境認識としては多少認識に乏しい面もある。



第3図 学生が描いた姫路市市街地の広い範囲の地図



第4図 学生が描いた姫路駅～姫路城以外の市街地の狭い範囲の地図

#### 4. 距離と方位の認知

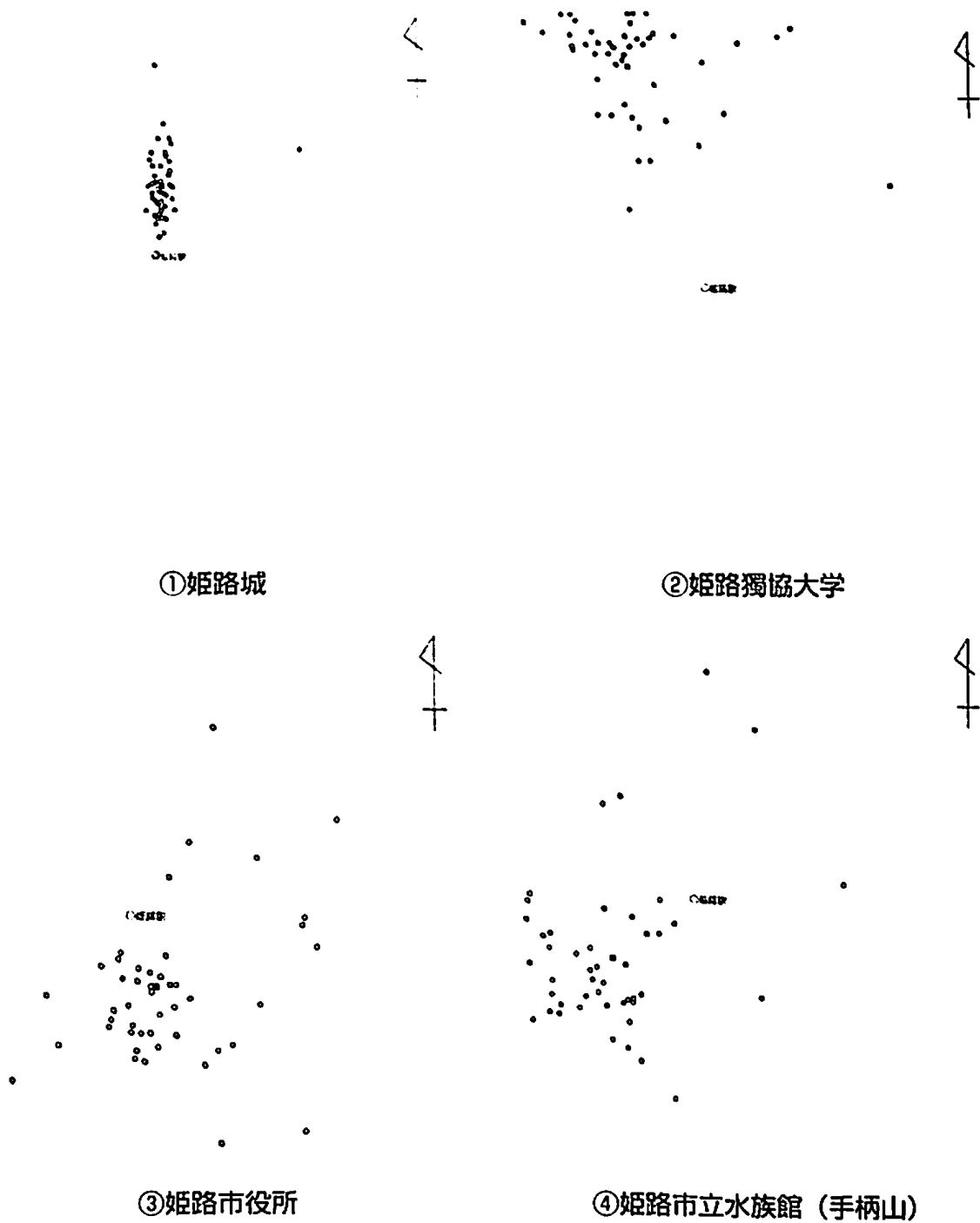
前章でみたように、本校学生の姫路のイメージは姫路駅から姫路城までの割合が高く、市街地全体についての認識に乏しいように思われた。そこで、地理学選択生が姫路市内のいくつかの施設・建物をどれだけ正確に認知しているかを知るために、姫路駅のみが記載されている地図に前述の12地点の推定位置を記入させた。

中村・岡本(1993)によると、直線距離は我々が日常生活の中で直接に経験することのない抽象概念であることから、直線距離の認知形態を調べることにより、その人の抱く都市の全体的なメンタルマップの特徴を明らかにできるとされている。したがって、特定の施設・建物について、ある地点からの推定位置を記入させることにより、学生がその施設を認知しているかを知ることができるとともに、都市に全体のメンタルマップのイメージの特徴を知ることができると考えられる。

第5図に学生に記入させた①から⑫の施設・建築物の記入位置を示す。なお、各図とも○は学生が記入した推定位置、●は実際の位置、■は学生が記入した推定位置の平均の位置である。ここで推定位置の平均値は、姫路駅を原点として東西方向と南北方向の軸を考え、学生が記入した位置の姫路駅からの距離を東西方向と南北方向の成分に分解し、各々平均して求めた。また、各図とも縮小して示しているが、学生には1kmを2cmで表して記入するように指示した。

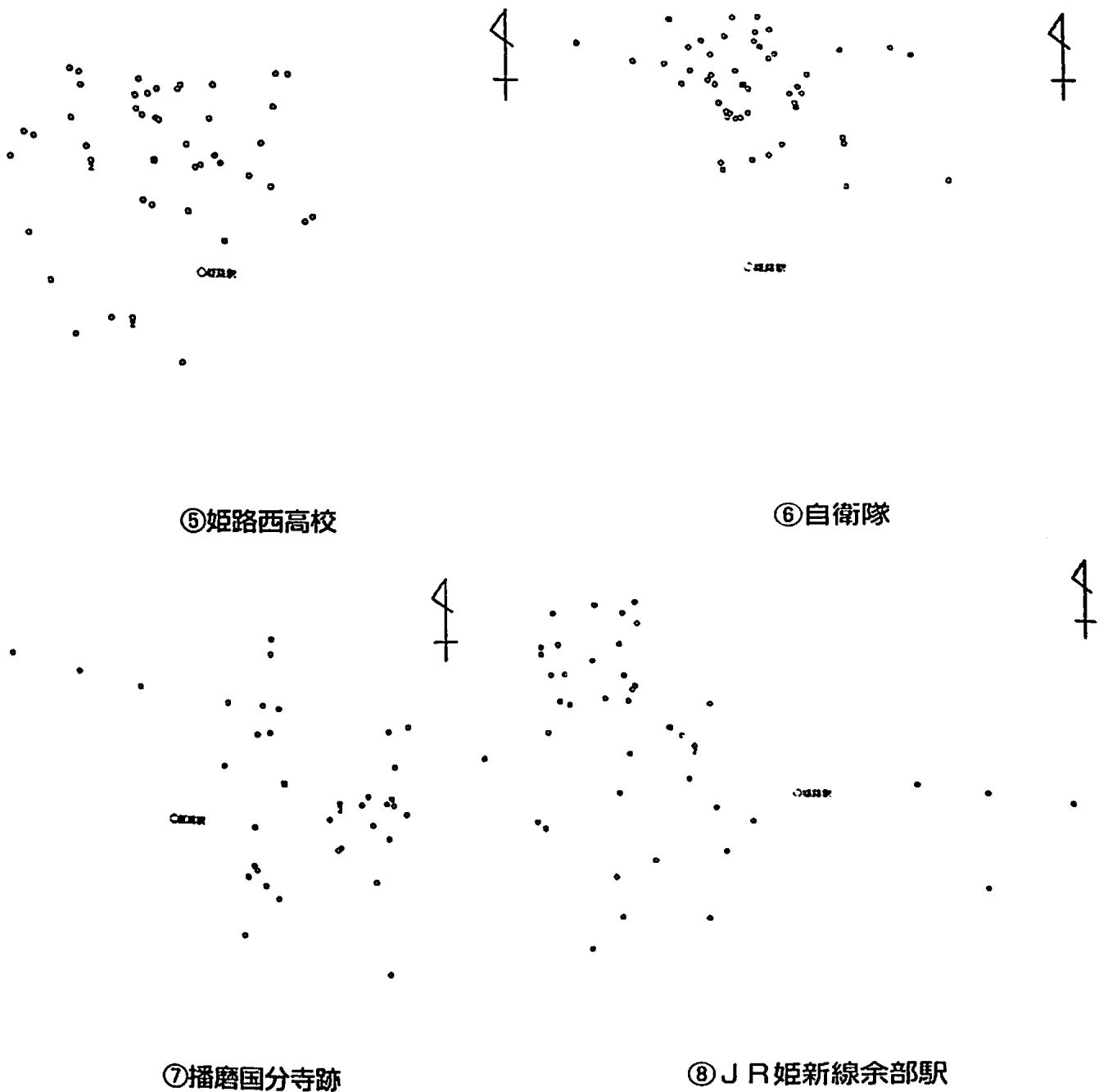
第5図によると、①の姫路城は姫路駅から北向き正面に見ることができることから、1人を除き方位はほぼ正しく表現されている。距離に関しては、実測では駅から天守閣までは1.2kmのところ、学生たちの推定位置(認知距離)の平均は1.7kmで、多少遠い位置に推定している。直線距離と認知距離の関係については、中村・岡本(1993)は都市内部のように、目的地に行くのに何度も交差点を曲がらなくてはいけないところでは、距離は実際より過大に評価されるという仮説を示しているが、このように直線で見えるところでも過大に評価する学生が多いことは注目すべきと考えられる。この理由として、姫路城は学生たちにとって、ランドマークとしては機能しているが、生活の一部には入っていないことが考えられる。なお、①の図で1人北東方向に推定している学生がいるが、これは他の地点と間違えたのではないかと思われる。

②は姫路獨協大学の推定位置である。地形図をみると姫路獨協大学は姫路駅の真北5.0kmのところにあるが、姫路駅から姫路城までの大手前通りが南北方向に走っているという先入観(実際は、駅からはわずかに東に寄って



第5図 学生が推定した各地点の位置 (1)

る) と、例えばバスで行くと、競馬場北東端から広嶺中学校まで西向きの長い直線道路を走るため、大学は駅よりみると北北西の方向に位置するという錯覚を受ける。その結果が学生たちの方位の認知にも表れており、多くの学生が北北西の方角に認知している。なお、認知方位が明らかに間違っている学生や、認知距離が短すぎる学生は、日頃姫路駅を利用していないので両者の位置関係

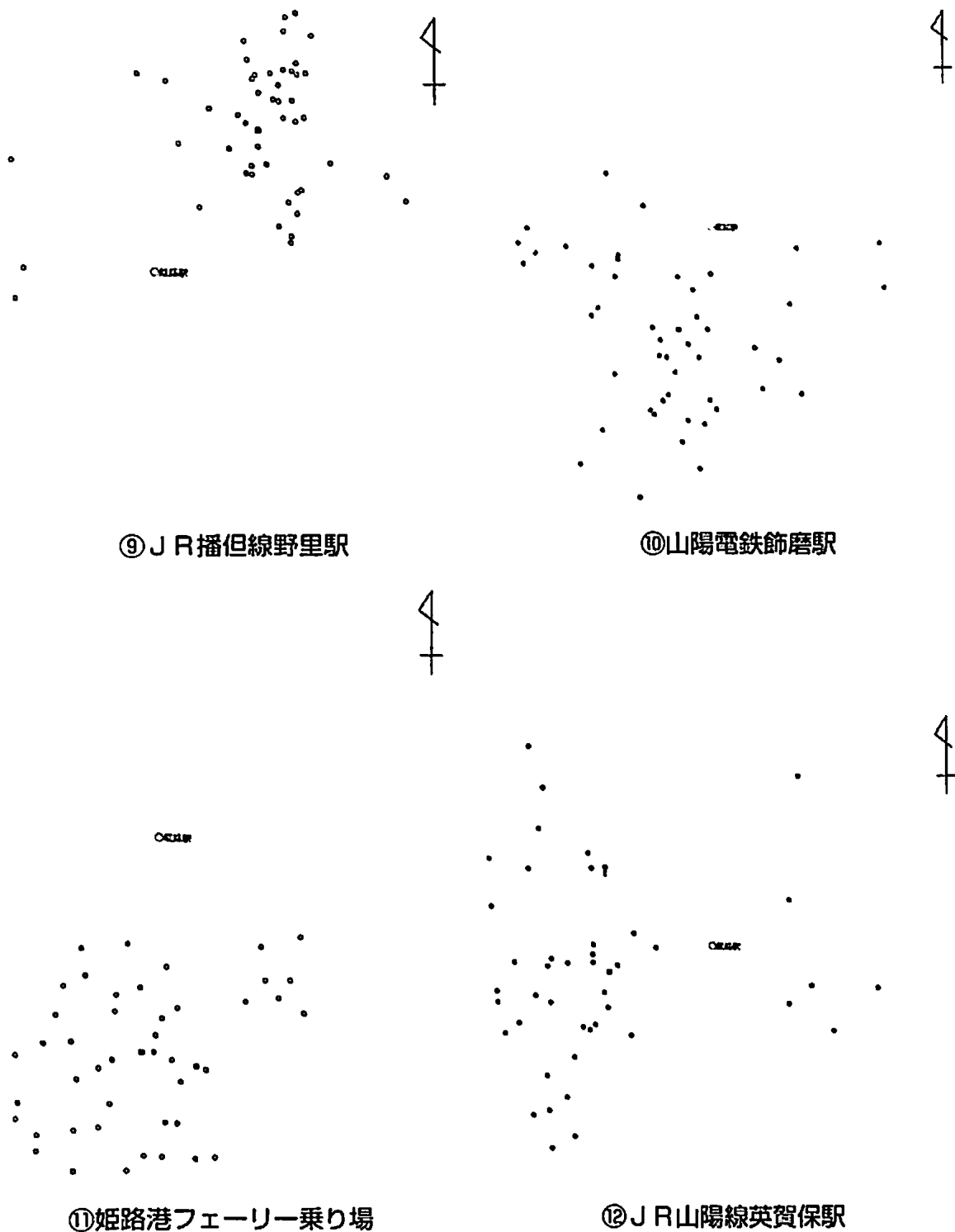


第5図 学生が推定した各地点の位置 (2)

がつかめていないのではないかと考えられる。また、②姫路獨協大学は市街地の北端に位置しているが、この図より、北側に関しては市街地を広く認識している学生が多いことが理解される。

③姫路市役所と④姫路市立水族館（手柄山）は②姫路獨協大学と同様、散らばりながらも推定位置の集団がみられる。手柄山で推定値の集団が実際の場所より遠くなっているのは、姫路市役所は姫路駅から直線で行くことができるの





第5図 学生が推定した各地点の位置 (3)

に対し、手柄山は直線で行くことができないためと考えられる。なお、駅の北側や東側など、全く異なる場所を推定している学生は、これらの場所を知らないのではないかと考えられる。

⑥自衛隊も学生たちは登校途中に目にしている施設であるが、このように多少分散した集団になっている。これも②と同様に、姫路駅から直線で行くことができないことに起因していると考えられる。なお、⑥自衛隊が②姫路獨協大学より姫路駅に近いということに関しては、どの学生も正しい結果を示していた。

残る⑤姫路西高校、⑦播磨国分寺跡、⑧J R余部駅、⑨J R野里駅、⑩山陽電鉄飾磨駅、⑪姫路港フェリー乗り場、⑫J R英賀保駅の位置の推定図はどれも大きく散らばった図となっている。これも各施設を知らない学生が多いことによるものと考えられる。これらの地点の中で、⑦播磨国分寺跡は市街地の東端を、⑧J R余部駅は北西端を、⑨J R野里駅は北東端を、⑪姫路港フェリー乗り場は南端を、⑫J R英賀保駅は南西端をイメージして設定したのであるが、西側では市街地の範囲を狭く、東側と南側では広く認識している学生が多いことが理解される。

## 5. まとめ

以上まとめると次のようになる。

本校学生の姫路のイメージは姫路駅から姫路城までの割合が高く、市街地全体についての認識に乏しいように思われる。また、市街地内の施設・建築物についても、日ごろ目にする姫路城や自衛隊は知っているものの、生活に関係しない施設等は知らないものが多い。これは、姫路市外出身の学生が多く、市街地全体にかかわる経験が少ないことに起因するものであり、他市町村あるいは他県から学びに来て、姫路市全体をを知らずに卒業していくことは、地理学を教える者としては残念なことである。

市街地の範囲について、学生たちは北側、東側、南側については実際よりも広く、西側については狭く認識している学生が多いと考えられる。

### 参考文献

- 加藤和裕 (1983) : 地名認知からみた沖縄本島におけるメンタルマップ発達 ; 本土出身琉球大生を対象として. 琉球大学卒業論文.
- 寺本 潔 (1884) : 子どもの知覚環境の発達に関する基礎的研究 — 熊本県阿蘇谷の場合一. 地理学評論, 57-2, pp.89~109.
- 寺本 潔・岩本広美・吉田和義 (1991) : 子どもの手描き地図からみた知覚空間の諸類型. 愛知教育大学研究報告, 40, pp.95~110.
- 中村 豊・岡本耕平 (1993) : 『メンタルマップ入門』. 古今書院, 146p.